

平成29年度  
座間市福祉推進作文・標語  
入選作品集

第44回座間市福祉大会

## 目 次

### 【小学校 1・2年生の部 最優秀賞】

立野台小学校 2年 識名 瑠菜 「やさしく しよう」 .....1

### 【小学校 3・4年生の部 最優秀賞】

立野台小学校 4年 加藤 葵 「かいご福祉士のお母さん」 .....2

### 【小学校 5・6年生の部 最優秀賞】

座間小学校 5年 西尾 彩花 「私が思う福祉」 .....4

### 【中学校の部 最優秀賞】

南中学校 2年 松尾 美穂 「優しい声掛けの社会で」 .....7

### 【小学校 1・2年生の部 優秀賞】

ひばりが丘小学校 2年 菅原 雷斗 「まもる」 .....10

中原小学校 2年 小暮 郁子 「こんな未来がまっているといいな」  
.....11

### 【小学校 3・4年生の部 優秀賞】

栗原小学校 3年 中神 裕久美 「みんなが笑顔でいられる理ゆう  
は・・・。」 .....12

相武台東小学校 4年 野上 紗生 「みんなが気持ちよくくらせる世界」  
.....14

### 【小学校 5・6年生の部 優秀賞】

ひばりが丘小学校 6年 山崎 結芽 「電車の中で」 .....16

東原小学校 6年 向山 実咲 「介護福祉士の仕事」 .....18

### 【中学校の部 優秀賞】

栗原中学校 2年 宮崎 葵 「音の無い世界」 .....20

南中学校 3年 八木 瑞希 「弟と福祉」 .....23

### 【小学校 1・2年生の部 佳作】

ひばりが丘小学校 2年 茂木 智也 「かぞくのためにできること」 .....26

【小学校3・4年生の部 佳作】

相模が丘小学校3年 清水 琉夏 「ぼくのおじいちゃん」 .....	27
旭小学校3年 加藤 楓馬 「オセロのふくし」 .....	30
栗原小学校4年 見越 悠成 「みんな同じ四年生」 .....	31
東原小学校4年 小櫃 梨衣 「私が思ったこと」 .....	32

【小学校5・6年生の部 佳作】

相武台東小学校5年 三宅 湧也 「自然に思いやりのある事」 .....	33
ひばりが丘小学校5年 前川 成瑠 「おばあちゃん、がんばって！」	35
立野台小学校5年 増川 こころ 「おばあちゃんのかいごをして感じた こと」 .....	37
座間小学校6年 佐久間 駿汰 「人の良いところ」 .....	39

【中学校の部 佳作】

栗原中学校2年 北村 真子 「もっと理解しあいたい」 .....	41
南中学校2年 小川 芳野 「障害者等用駐車スペースについて」 .....	44
南中学校2年 常野 望愛 「道をひらくために」 .....	47
南中学校3年 小畑 郁弥 「福祉について」 .....	50

【標語の部 最優秀賞】

東中学校2年 澤田 芽 .....	53
-------------------	----

【標語の部 優秀賞】

東中学校3年 南平 夏果 .....	53
座間在住 清水 隆 .....	53

【標語の部 佳作】

座間小学校2年 高橋 千歩 .....	53
相武台東小学校4年 河治 美和 .....	53
座間中学校1年 小川 桃子 .....	53
南中学校1年 和田 実優 .....	53

※児童・生徒の氏名及び本文中の漢字の使用については、原文の表記に従っています。

## 【小学校1・2年生の部 最優秀賞】

やさしく しょう

立野台小学校2年 識名 瑠菜

はせがわくん<sup>※1</sup>のように、体のどこかにふじゆうなところがある人には、やさしくしてあげたいです。

わたしのかあさんも、かいごのしごとをやっていました。聞いてみたら、大へんだけど、やくに立ててうれしいと言っていました。わたしもこまっている人のやくに立ちたいです。

よく母さんとスーパーにいくと、つえでじめんをたたいてあるいている人がいます。たぶんその人は目がわるくて見えないから、つえをつかってあるいているんだと思います。

生まれつき目がわるい人、耳が聞こえない人、手が一本ない人、体にしょうがいがある人、ふつうの人、みんな人それぞれだけど、自分の生きかたで、生きるというその思いが「はせがわくんきらいや」の話でかんじとれました。

わたしも耳、目、手、体など、どこかにしょうがいがある人に気づかいをもち、お年よりにも手つだってあげたり、やさしくしてあげたりしたいです。

---

<sup>※1</sup> 長谷川集平 著「はせがわくんきらいや」の登場人物

## 【小学校3・4年生の部 最優秀賞】

かいご福祉士のお母さん

立野台小学校4年 加藤 葵

わたしのお母さんは、かいご福祉士です。毎日高れい者や、障がいのある人と向きあっています。そんなお母さんの言葉で、わたしの高れい者や障がいの人の見方がかわりました。

わたしが、ようち園の年中くらいの出来事です。ある日、お母さんのしょく場に行くことになりました。そして、そこに入ったしゅん間にみんなから、

「今、高れい者の人たちでレクレーションをやってるからいっしょにやろうよ。」

と、言われました。わたしは、そう言われてそこに行きました。最初の方は、みんなで楽しくやっていました。だけど、急におじいちゃんがおこってきました。

「ここは、子どもの遊ぶところじゃないんだぞ。」

わたしはこわくなってないてしまいました。すると、お母さんがわたしのせなかをおしながら出ていきました。

家に帰ると、お母さんは、

「あの、おじいさんは、にん知しょうなんだよ。わけがわからなくなってあなたをおこってしまったんだよ。あなただって、わけのわからない所につれて行かれたらふ安になるでしょ。おじいさんは、ふ安だったからそのイライラをあなたにぶつけてしまったんだよ。」この言葉でわたしの高れい者や障がい者の人の見方はガラッとかわりました。わたしは、「あのおじいさんはそんなふうにふ安だったんだな。あそこでないちゃったの、なんかもうしわけなかつ

たな。」と思いました。

その後、わたしはお母さんに聞きました。

「どうしてままはかいご福祉士になったの。」

するとお母さんは、

「わたしは、昔からおじいちゃん、おばあちゃんが大好きだったんだよ。大好きな人の手助けをしたいとあなたも思わない。だからかいご福祉士になったんだよ。今もこの仕事をつづけられて幸せだよ。」

と、言いました。わたしは、何だかほっこりしたような気がしました。

今ではその体験はよかったと思っています。なぜなら、いろんな人がいるんだなと気づけたからです。もし、わたしが高れい者や、障がい者だったら、「かわいそう」とか特別あつかいされるのはいやです。わたしはこれからもふつうにせっしてあげたいです。毎日おこられながらも、高れい者さんたちと向きあっているお母さんが、なんだかほこらしく思えました。

## 【小学校5・6年生の部 最優秀賞】

私が思う福祉

座間小学校5年 西尾 彩花

みなさんは「福祉」という言葉を知っていますか？知らなくても聞いたり、見た事はあると思います。「福祉」と聞いたら、もうどう犬や目の不自由な方などを思いうかべるとは思います。福祉とは人が「幸せ」になることをいいます。おばあちゃんやおじいちゃん、高齢者の方々を助けたり、迷子になっている子を助けたり、ボランティア活動をしたりも福祉なのです。だれかのために地いきのために動き、力になったり幸せな気持ちになればもうりっぱな福祉なのです。なので、思っているより自分達の周りにも福祉はあると私は思いました。

そもそも幸せとは何なんだろう？福祉とは人が「幸せ」になることを言うのなら、じゃあ「幸せ」とはどういう事？「幸せ」という言葉は知っているけれど、

「幸せとは何ですか？」

と聞かれたら正直私は分らなくなると思います。「幸せ」と言ったり、書いたり出来る。でも、意味も分からなくてどうやって人を幸せに出来るのか私には分かりません。そこで私は知らせてみました。すると、

「自分が幸せを感じていないのであれば幸せではないのです。つまり「幸せとは何か」の結論を言うと、幸せとは「感じ方」なのです。幸せだなと感じるのは心のじょうたいが「幸せ」だということです。」

と書かれていて、さらに、

「逆に、今このしゅんかんも幸せの条件は整っています。

それは感じられるか、感じられないかのちがいのなのです。だから幸せを求めに外に向かわず、自分の内側を見てください。」

と言われていて、まずは人を幸せにする前に自分が幸せと感じられなくては相手を幸せにすることは出来ないと思いました。だから相手を幸せにしたかったら、まず自分の心の内側を見る！と調べたのを見て感じました。そこで、福祉は自分と相手を見てやるともっと出来ると思いました。

これもふまえてみなさんは「福祉とは？」と聞かれたら何が福祉だと思えますか？

私は病院の先生だと思いました。病院の先生はみんなの病気やけがを治して元気にさせるからです。なかには病院の先生に命を救ってもらったという人もいるのではないのでしょうか。私のおじいちゃん二人はがんになり、もう一人は病気になってしまって病院の先生にはお世話になりました。私は一人一人元気になるように折り紙で贈りものをあげ、行ける時にはお見まいにも行きました。それに家族みんなで元気になるように願い続けました。でも、その願いはとどかず、おじいちゃん達は亡くなってしまいました。でも、先生方も出来るかぎりの事はしてくれたと思うので、悔いもなく安らかに亡くなったと思います。

また、お母さんの手伝いも福祉だと思いました。お母さん一人でやると、仕事もやって、それにつかれているのに夜ご飯も作ってせんとくもだとたおれちゃいそうなので、だれかが一人でも手伝うとお母さんは楽になって少しでも休む時間ができると思ったからです。

福祉とは色々なところがあり、まだまだあると思います！今回思った事、知った事がいっぱいあると思います。



福祉とは身近なそんざいなので、これからは福祉にどんどん関わっていきたいです。

## 【中学校の部 最優秀賞】

優しい声掛けの社会で

南中学校2年 松尾 美穂

今年一月、私はテレビのニュースを見ていた時こんなニュースが報道されていた。

そのニュースは、盲導犬を連れていた視覚障がいのある六十代男性が駅のホームから足を踏み外して転落し、列車にはねられたという悲惨な内容だった。

最近、視覚に障がいのある方などが駅のホームから転落することが多い。このような事故に対して盲導犬が仕事をしていなかったことや転落防止の柵を設置していなかった事が原因というような意見がある。確かに、転落防止の柵は子どもやお年寄りの方たちの転落を防ぐためとても便利だ。しかし、これは一つのホームに設置するには億単位の予算が必要となってしまうのだ。

これに対して、私は何故近くにいた人や駅員さんが声を掛けなかったのだろうかと思った。誰かが「大丈夫ですか。お手伝いしましょうか。」と一声掛ければ防げたことではないだろうか。

しかし、自分がその場にいたら事故を防げたとは断言できない。また、その一声を掛けられただろうか。きっとできなかっただろう。その訳には、こんな経験があるからだ。

私が小学校中学年の時、福祉学習で視覚に障がいを持った方と盲導犬が小学校に訪問してもらったことがある。その人は、本当に目が見えていないのか疑ってしまうほどスムーズに体育館に入って来た。そして、その方はたくさんの体験談や普通の生活さらに、盲導犬について話をして

らった中でこんな話が記憶に残っている。「いきなり声をかけないで、少し私たちの様子を見てください。そうしないと、盲導犬は安全に歩けなくなってしまう。もし、困っていそうだったら声を掛けてください。」という話だ。小学生の私はその時「少し様子を見る」ということに驚いた。困っていたら声を掛けるという行為だけでなく様子を見るということも手伝いになるんだと学習した。福祉学習後、私は困っている人がいたら「少し様子を見て、困っていそうだったら声を掛けてみよう」と決めていた。

そして、家族と電車で旅行に行った時の事だ。ホームで電車が来るのを待っている時に、私たちの前には白杖を持った人が立っていた。その人は黄色い線の少し外側に立っていて、電車が来たら危ないのではないのかと思った。

「黄色い線の外側に居ますよ。」と声を掛けようと思ったが、なかなか勇気が出ず、「少ししか線から出ていないし、本当に危なかったらもっと近くの人が言ってくれるよね。」と私は考えてしまった。

その人は無事で何もなかったのだが、もしその時に声を掛けなくて事故にあっていたらと思うと怖かった。さらに、「声を掛けよう」と決めていたのに実行できなくて悔しかった。

その後も何度かそのような場面はあったが、声を掛けることはできなかった。

だから、私はこのような危ない時でも声を掛けることはできないと思ったのだ。

また、そのような場面で声を掛けている人を殆ど見たことがないのだ。

では、どうしたら、こんな私でも温かい声を掛けられる

ようになり、また社会全体でも自然に声掛けができるようになるのだろうか。

まず、私たちが身近にできる声掛けは何かと考えた。そこで思いついたのは「挨拶」だ。普段の生活の中で挨拶は学校で先生や知り合いの先輩、友達ぐらいしかしない。日本では普通のことだと思うが米国や英国では、電車やバスにたまたま乗り合わせていた人がくしゃみをしたら「神のご加護がありますように。」と声を掛ける習慣があるのだ。この知らない人が知らない人を気づかう習慣は、素晴らしいことだと思った。

挨拶などの気づかひの心を持つには、一人一人が意識を変え、オープンな心でいることが大切だと考えた。

近年の日本では、声掛けが少ない。気づかひの心を持ち、時には見守りながらも困っていると判断したら声を掛けるという助け合いの精神を持つことが大切である。

この事故も誰か一人でも「危ない。」と言っていたら防げた事故だと思う。このような事故を二度と起こさないためにも、「見守る」「声掛け」の二つの気づかひを意識して暮らしていければと思う。

声を掛けることが「特別」ではなく、「普通」という考えの広がった社会であってほしい。

## 【小学校1・2年生の部 優秀賞】

まもる

ひばりが丘小学校2年 菅原 雷斗

学校のじゅぎょうで、「ふくし」についてみんなでかんがえました。

ぼくは、かぞくをまもりたいです。ともだちも、まもりたいです。ともだちは、いっしょにあそんでくれるからです。おじいさんやおばあさんにしんせつにすることを、まいにちやることがだいじです。しあわせにしてあげるのがいいのかなとおもいました。みちにまよっていたらおしえてあげたり、てつだったりしてあげたいです。

みんなをまもりたいです。

## 【小学校1・2年生の部 優秀賞】

こんなみらいがまっているといいな

中原小学校2年 小暮 郁子

わたしは、れきしの本をいっぱいよんでいるから目のふじゆうな人や、耳のふじゆうな人たちが、おかしにはいっぱいいるのはしています。

なので、こんなことをおもいました。目のふじゆうな人は、音やつえがたよりです。なので、どうろのところから、人があるくところにかべがあったらあるきやすいとおもいます。そうすれば目のふじゆうな人や耳のふじゆうな人が、車のはしるどうろにとびださないとおもいます。

耳がふじゆうな人は、紙とペンと目だけがたよりです。それだけではさみしいので、「スロープ」があるともっとくらしやすいとおもいます。トイレにもスーパーマーケットにも「スロープ」をつけるといいとおもいます。そうすればだれでもどこへでもいけるし、くるしいところもすこしはかるくになるとおもいます。

わたしは人のくらしをよりよくするための、せっけい図をしょうらいつくりたいです。なぜかというと、わたしはえをかくのがだいすきだからです。

だから、車いすの人も耳や目がふじゆうな人もえ顔いっぱいのみらいがまっていることをねがっています。

## 【小学校3・4年生の部 優秀賞】

みんなが笑顔でいられる理由は・・・。

栗原小学校3年 中神 裕久美

わたしたちは、遠足でサニープレイスに行きました。サニープレイスでは、体のふ自ゆうな人にもたくさんやさしきであふれていました。

まず、わたしのいんしょうにのこったことから書きます。

さいしょは、手すりです。ふつうの手すりは、一本で何もついていなくてツルツルです。でもサニープレイスの手すりは、目がふ自ゆうな人や、年をとって、せなかが丸くなっている人でも心ばいしないように、手すりが二本だったり、てんてんがさいしょとおわりにつけてあったりしました。

わたしは、手すりを見おわってから「ここまで気をつけているんだ。すごい。」と思いました。

次は、トイレです。トイレは、ふつうみんながつかっているのはかがみがまっすぐで、天井は何にもついていませんよね。ドアだって、開けたりしめたり手でやりますよね。でも、サニープレイスのトイレだと、かがみが下から上へとななめになっています。理由は、車いすの人でも体の全体が見えるようになっていたんだそうです。わたしたちがななめのかがみにうつると、頭でっかちに見えました。

ほかにも、ボランティアの人たちが手話を勉強するへやがありました。わたしたちも、体のふ自ゆうな人のことを考えて行どうするやさしきがひつようだと思います。

さいごは、わたしたちのみのまわりのことです。もし、

電車の中で一人ごとみたいなことをしている人がいて、その人がこまっていたら、たすけてあげたいです。わたしは、みんなでなかよく生活していくことと、ささえ合っていくことが大切だと考えます。

わたしは、これからもぎ間市が、笑顔でいっぱいになったらすてきだと思いました。わたしが大きくなったら、体がふ自ゆうでない人も、ふ自ゆうな人もやさしくして、笑顔やしあわせをふやしていける人になりたいです。



## 【小学校3・4年生の部 優秀賞】

みんなが気持ちよくくらせる世界

相武台東小学校4年 野上 紗生

わたしは、いろいろな福祉のことについて、「みんなが気持ちよくくらせる世界」とは、どんな世界なのかと思いました。

一つ目は、町の中にあるいろいろなせつびについて考えました。

学校で、福祉のビデオを見たときに、ビデオの中には足の不自由な人で、車いすで生活している人が出てきました。車いすにのっているその人は、町の中にある小さなだんさや、道のほんの少しのけいしゃにも、少し苦ろうしていて、お年よりの人や、力の弱い人だと大変で、ほかの人に手つだってもらわないといけない事があるらしいです。

また、外へ出る時には、車いす用のトイレ(みんなのトイレ)があるというじょうほうがないと、外出はおずかしいそうです。

このことを知って、町の一つのせつびなどによって、体の不自由な人の生活が変わると思いました。

二つ目は、まわりの人たちの気づかいについて、考えました。

運動会など、人がたくさん集まる場所などに、足の不自由な人が車いすで来ると、まわりの人たちはきっと、

「かわいそうだな。」

とってしまうと思います。なぜなら、わたしもそうだからです。でも、体の不自由な人も、みんなそれぞれ生きているので、町などでこまっているお年よりの人や、体の不

自由な人には、声をかけてみたいと思いました。

「みんなが気持ちよくくらせる世界」  
ができるにはまだまだ時間がかかりそうだと思いましたが、  
しょう来、自分が大人になった時には、一人でも多くの人  
が気持ちよくくらせるようになったらいいと思いまし  
た。」

## 【小学校5・6年生の部 優秀賞】

電車の中で

ひばりが丘小学校6年 山崎 結芽

私は、電車の中で見た事についてお話します。

ある日私は、習い事のスイミングに行くために電車に乗っていました。何駅かすると、一人の足が悪くつえをついているおじいさんが乗って来ました。でも、席はあいていなく、おじいさんは立っていました。私は立っていたので、席をゆずることはできませんでした。席にすわっているひとたちは、みんなわかくて足が悪かったりするわけでもないのに譲りません。とてもかわいそうだと思って見ていました。すると一人の男性がそのおじいさんに気づき、席をゆずろうとしました。でもおじいさんは

「いいよいいよ。あなたもつかれているんだろ。すわってください。」

と断りました。でも男性は

「いいんですよ。ぼくはだいじょうぶですから。」

とあきらめないで、おじいさんにゆずろうとしていました。おじいさんは、

「ごめんなあ。じゃあ、お言葉にあまえてすわらせていただくよ。ありがとうな。」

とって、男性からゆずってもらった席に男性に何回もおれいを言ってすわりました。そして、男性は何駅か先の駅でおりていきました。おじいさんもしっかりしていました。

私は、その男性を、とってもやさしく、あたたかい人なんだなと思いました。ゆずるという事も勇気のある事だし、一度

「いいです。」

と断られているのにもう一度

「席すわってください。」

と言えることがとてもすごいと思いました。その一方で、その男性以外の人には、なんで席をゆずってあげないんだろ？と思いました。こまった時や、助けられた事はないのかなとその人達に強く思いました。私は、席をゆずってもらった事があるので、その時にどんなにうれしかったのか知っています。だから、そのおじいさんもきっとうれしかったんだと思いました。男性も勇気を出したんだと思うから、「ありがとう。」といってもらえた時うれしかったんじゃないかなと思いました。ゆずった人も、ゆずってもらった人もあたたかい気持ちになれるのはすごいと思います。だから私も、その男性みたいに、身体の不自由な人や、おじいちゃん、おばあちゃんがいたら勇気を出して声をかけ、席をゆずろうと思いました。そして、そんな風に思ってくれる人が増えてほしいと思いました。

## 【小学校5・6年生の部 優秀賞】

### 介護福祉士の仕事

東原小学校6年 向山 実咲

私のお母さんは、介護福祉士でした。なので、テレビなどで介護の話が始まったりすると、お母さんはうなずきながら夢中で見て「そうなんだよね。」と言います。

そういった話を聞いてある日、「私も介護福祉士になりたい。」と思いお母さんに言うと、「いいと思うけど大変なんだよ。」という返事がかえってきました。それから、介護福祉士の仕事で楽しい事と大変な事を話してくれました。

まず大変なことは、その施設にいるおばあさんやおじいさんは同じ事を何度も話してしまうことがあります。だけど、聞いて話をするのも一つの楽しみだそうです。そして、おばあさんやおじいさんの中には歩くのが難しい方もいるので、しっかりサポートしながらゆっくりと歩き、歩くのを手助けしたりもするそうだけど、歩くペースが速すぎると相手がついてこられなくなってしまうし、おそすぎると相手が歩きにくくなってしまうので、スピードを調節するのがとても大変なんだなと思いました。それから体の不自由な方の介助をするのはかなり重労働のため、体をこわす人もいるそうです。このように大変な事もあるそうですが、逆に楽しい事もあるのだそうです。

その楽しい事とは、おばあさんやおじいさんがよくいろいろな話をしてくれることです。自分たちの昔の話を語り始め、その話を聞くのも楽しいそうです。そしておばあさんやおじいさん達とレクリエーションをして遊んだり、い

っしょに歌ったり、とても楽しい事もあるそうです。

このように大変で辛い事もありますが、利用者さん達とふれ合う事もできて楽しい所もあるので、介護福祉士になりたいと思う気持ちが強まりました。

介護福祉士という職業は、警察官や医者のようにたくさんの方が知っているものではありません。だけど介護士がいなくなると、家ですべての介護をしなくてはいけなくなり、とても大変です。なので、あまり知られていない仕事でも、とても大切で必要な仕事だと思います。どんなに大変でも利用者さんが喜んでくれたら大きな達成感があるし、楽しい事もとてもたくさんある仕事なのだと思います。だから勉強が大変でも、介護福祉士になりたいと思う人がどんどん増えていき、高れい者の方々がもっとくらしやすくなっていくといいなと思いました。

私もこれから学校の勉強だけでなく、人とのかかわりや社会のこともたくさん勉強して、すてきな介護福祉士になれるように努力していきたいと思いました。自分も、周囲の人もみんなが笑顔になれるような、そんな社会になったら幸せです。

## 【中学校の部 優秀賞】

### 音の無い世界

栗原中学校2年 宮崎 葵

私たちは、目が見えて、耳が聞こえて、手足を自由に動かせてなど自由に暮らせています。ですが、この世の中には私たちと全く同じようには暮らせない人たちがたくさん存在するのです。

私は以前、実際に聴覚障がい者の方々に話を聞きました。私は、耳が聞こえないというのはとても大変でつらいことで、普段の生活に大きく影響していると思っていました。ですが、私が聞いた話は思っていたことと違いました。話してくださったその方は、

「耳が聞こえないというのは、他の人と比べて生活は不自由になってしまうけれど、耳が聞こえないからこそ分かったことがあった。」

と話してくれました。その分かったこととは、周りの人たちの優しさだったそうです。

「耳が聞こえない自分のために、ていねいに説明してくれたり、生活を支えてくれたりして、すごく感謝している。」

と話してくれました。

もし私が、聴覚障がい者という立場だったら、このようには考えられないと思いました。なぜなら、自分が周りとは違ってとてもつらいはずなのに、感謝の気持ちを忘れないというのはすごいと思いました。

これらのことをふまえて、私たちにはできることがたくさんあると改めて思うことができました。

まず一つ目は、自分から積極的に話しかけることだと思います。耳が聞こえなくても、見る事はできます。なので、口元の動きがはっきりと見えるように話しかけたらいいと思いました。話を聞いたとき、実際に聴覚障がい者の方が、「マスクをつけている人は口元が見えなくてこわい。」と話してくださいました。理由は、口元の動きが見えないと、何を伝えようとしているのかが全く分からないそうです。聴覚障がい者の方は、伝えようとしている人の表情や口の動きを見て話を理解するので、大切だと思いました。

二つ目は、筆記をすることだと思いました。聴覚障がい者の方々は、「筆記をしてください」というカードを持っています。このカードを見せてもらったなら断るのではなく、相手の知りたいことを、分かりやすく筆記することが大切だと思いました。

三つ目は、全員が手話を覚えることだと思いました。全員が手話を覚えるのはとても難しいことだと思います。ですが、みんなが手話を覚えれば、話さなくても簡単に会話をする事ができるし、聴覚障がい者の方々も私たち全員が、手話を使うことができれば、何か困ったことがあったときに、私たちに気軽に声をかけてもらえると思ったからです。ですが、今の世の中、手話を学べる場所はなかなかないと思います。なので、全員が勉強することができる小学校・中学校で、手話を学べる時間ができたら良いと思いました。そうすれば、これからの世の中は、先程のように気軽に話しかけやすい世界になると思いました。

四つ目は、一度自分たちで、聴覚障がい者の方々の立場になってみる事だと思いました。一度同じ目線になってみれば、大変なこと、つらいことなど、新たに分かること



がたくさんあると思います。それを知られば、さらに聴覚障がい者の方々が声をかけやすくなると思いました。

このように考えると、私たちにできることは考えれば考えるほどたくさん出てきます。このアイデアを現実にしていくのが、これからの日本を作っていく私たちだと思います。それを一人で考えるのではなく、全員が同じように考えられれば良いと思いました。

「福祉」とは、「幸福」という意味です。私は、「福祉」の意味をお年寄りの方々や障がい者の方々をさすものだと思っていました。ですが、改めて「福祉」について深く考えてみると、分かることがたくさんありました。この考えを忘れず、生かしていきたいと思います。

先程のように、私たちにできることはたくさんあります。そして、私たちは日本の未来のために、考えていかなければならないのです。

この世界から困っている人が一人でも減ることを願います。

## 【中学校の部 優秀賞】

弟と福祉

南中学校3年 八木 瑞希

私の弟は、現在小学校の支援級に在籍しています。

弟の発達の遅れが最初に表面に出たのは、年少のころ。気が付いたのは、保育園の先生です。弟を保育園に送ると、だいたい号泣していたのですが、送ってしばらくしてもずっと泣いていたそうです。年少なので他にも泣いている子はいましたが、だいたいすぐ泣きやんでケロっとして遊んでいたそうです。しかし弟だけは泣き続け、しまいには自分の口に指を突っ込んで吐いてしまったそうです。早生まれということもあり、その時は様子を見ることになったのですが、年中のころ遠足の日には問題は起きました。朝、保育園でなく、駅に集合するだけでパニックになる。親が切符を買うのも、先生や友達と並んで待てずに泣く。集合写真も、親が少し離れただけで泣く。さすがにこれはおかしいということになり、市や病院で様々なテストを行ったところ、発達の遅れが見つかりました。初めて知ったときは正直ショックでしたが、周りと同じように笑う姿を見て、そこまで特別視はしなくていいことを感じました。

とはいえ、何もしなくていいということではありません。

弟は形を認識したり、動いているものの動きをとらえる「目の力」が弱いのです。学校の宿題である日記の表紙に油性ペンで「日」と書いてありました。また漢字練習の際、何度注意しても家が「」馬が「」になるなど、正確に書けません。そこで、先生に相談して漢字プリントを拡大したものを用意してもらうようにしました。そのおかげで、

前より書き間違いが減りました。

また、弟は運動することも苦手です。運動音痴とかそういうレベルではなく、ドッジボールでゆっくり投げたボールが自分にぶつかってから手を伸ばしたり、縄とびの縄がうまく回せなかったりします。療育の先生は、まずフワフワした風船をキャッチすることから始めてくれました。できるようになると、風船に少しずつテープをはって重くしていき、ゴムの柔らかいボールだと胸でキャッチできるレベルにまでなりました。縄とびも、まずは水道管とフラフープで作ったオリジナル縄とびでとんだところ、すぐに何回か連続でとべるようになりました。

このように周りと同じ方法ではできないことが、工夫をすればできるようになります。できないことができるということは、これから先の人生に役立ちますが、それだけではありません。できたことが自信につながり、前よりも様々なことに意欲的に取り組むようになりました。毎日を楽しく過ごすということは、人生においてとても重要なことだと思えます。弟に対するケアは、その重要なことをできるようにしてくれたのです。福祉とは、こういう当たり前の幸せを目指しているのだと思いました。

弟のことで、私は福祉をになう様々な職業があることを知りました。日常の動作を行う訓練をする作業療法師、人との関わり方を教えてくれる臨床心理士や言語聴覚士などです。国家試験を受けなければならないものもあります。また、職業だけでなく、市役所には障がい福祉課があり、様々な支援の手助けをしてくれます。療育を受けるための受給者証は、ここで発行してもらえます。

このように日常生活に支障がある場合には、制度を上手

く利用することが望ましいと言えます。けれども、そういった課や資格のある人だけが困っている人を助けられるのかというと、そうではないと思います。例えば、宿題の漢字で困っていたら大きく拡大して書いてあげたり、風船でドッジボールの相手になったりすることができます。そして、弟と向き合うことによって、自分が気付かされることもたくさんあります。一つの目標に対していろいろな手段を考えることになるので、弟以外の人とのコミュニケーションをはかる時に役立つことがあるのです。それは、自分にとって間違いなくプラスです。

福祉という漠然としたイメージしか持てませんでした。自分も含め誰もが人として幸せな生活を送るためのステップだと思うと少し具体的な行動に移せるような気がします。第一人のことだけでも、これだけたくさんのできることはあるのです。できることがたくさんあるということは、逆に問題や課題が山積みだとも言えます。それを投げだすのではなく、一人一人が、そして社会全体で一つずつ解決していけば、福祉の充実した世界と言えるのだと思います。

## 【小学校1・2年生の部 佳作】

かぞくのためにできること

ひばりが丘小学校2年 茂木 智也

学校のじゅぎょうで、「ふくし」についてみんなでかんがえました。

ぼくは、ふくしがかぞくのため、まわりのしあわせだとおもいます。

ぼくはかぞくのでつだいをしてたらほんとありがとねといわれて、そんなにおてつだいがだいじだとおもったので、またかぞくのためにおてつだいをしたいとおもいます。

ぼくが、一ばんとくいなあらいものをすると、ありがとっていってくれるといいきもちがするから、ぼくもなにかしてくれたらおれいをいいたいです。

## 【小学校3・4年生の部 佳作】

ぼくのおじいちゃん

相模が丘小学校3年 清水 琉夏

ぼくのおじいちゃんは、ちよくちょうがんという、がんになってしまいました。ちよくちょうがんというのは、名前のとおり、ちょうにできるがんです。

ちよくちょうがんなので、おしりの穴をふさいでおなかからうんちがでるようになっていきます。

しゅじゅつをして今は元気ですが、がんになってしまっ  
てすごくかわいそうです。

それにおなかに力がはいらず、くしゃみやせきをする  
と、おなかがいたくなってしまう。

ぼくもせきがひどいときに、おなかがいたくなります。

ぼくよりもすごくいたそうでした。

りゆうは、ぼくは、せきをしていたいけど、おじい  
ちゃんは、なきそうになりながらいたいと言っている  
からです。

本当にかわいそうです。

ぼくのおじいちゃんは、ごはんがあまりたべられ  
ません。ぼくは、おなかがすいているんだなと思  
いました。でもぼくは、ごはんをあげたい気持  
ちはすごくあったけど、がまんしながらお  
じいちゃんを見ていました。

ごはんのたきたてはおいしいのに、おじい  
ちゃんは、おかゆにしてぬるくしないと食  
べられません。

おじいちゃんが、ごはんを食べているところ  
を見ました。

ほうれんそうがはいってました。

ぼくは、おじいちゃんに

「味は、どう？」

と、聞いてみました。

そうしたら、おじいちゃんが

「味がまったくしない。」

といいました。

おじいちゃんが、

「食べてみな。」

といったから食べてみました。

そうしたら、おじいちゃんの言うとおり味がまったくしませんでした。

おじいちゃんは、おいしいごはんを食べられなくて、かなしいしぎんねんだと思います。

おじいちゃんを、ぼくが楽になる言葉を言って、おじいちゃんがすこしでも楽に、元気になってほしいです。

今は、元気なのでよかったです。

ぼくもにゅういんしたことがあって、すこしきみしかったり早くたいいんしたいなど、おじいちゃんも思っていると思います。

おじいちゃんが、できるだけ楽になってほしいなと思いました。

今もおとしよりがいっぱいいるので、何かこまっていたか、話を聞いてあげて、気持ちがあっさりして、えがおになるようにやくだちたいです。

おはようございます。こんにちはなど、あいさつをして、おとしよりが元気になるようにがんばりたいです。ぼくだけでなく、みんなであいさつができたらいいなと思います。

おとしよりだけでなく、子どもどうしであいさつ、ちいきの人にもあいさつ、家ぞくでもあいさつをすれば、だれとでもあいさつができると思いました。

あいさつをしたほうがいいです。

りゆうは、したほうもされたほうも、気持ちがよくなるからです。

これからもいろいろな人にあいさつをして、みんなが気持ちがよくなるように、がんばりたいです。



## 【小学校3・4年生の部 佳作】

オセロのふくし

旭小学校3年 加藤 楓馬

ぼくは、本で、目が不自由な人もオセロができるということを知りました。ぼくは、目が不自由な人もオセロができるなんて思いませんでした。なぜなら、目が不自由だったら白や黒の色がわからないからです。

目が不自由な人もできるオセロのあそび方は、一つ一つのマスに、白・黒のコマがはいっていて、それをまわしてあそぶのです。つぎに、黒のコマの方にはみぞがはいっていると書いてありました。ぼくは、これも点字とおなじような物だな、と思いました。このオセロは、売っているかわからないけれど、売っていたらしょうがいがない人でも、ふつうのオセロよりこれを買った方がいいと思います。なぜなら、コマをなくすしんぱいがないからです。

ぼくは、目が不自由な人もオセロができるなんてはじめはありえないと思ったけれど、本を読んでいくうちに、こういうゲームには、だれでもできるようになにかしらのくふうがされていると思うようになりました。しょうがいがあってもオセロができるというのは、しょうがいがある人にとってとてもうれしいことだと思います。

## 【小学校3・4年生の部 佳作】

みんな同じ四年生

栗原小学校4年 見越 悠成

五月十五日の月曜日、吉川先生に「みんなが幸せになれる話。」について聞きました。

ぼくのクラスにはさくら級の男の子と、女の子がいます。いっしょに体育をしたり、給食を食べたりします。男の子と女の子には、やさしいところがいっぱいあります。男の子は元気よくあいさつをして、みんなを盛り上げてくれます。女の子はいつもニコニコして、クラスのみんなを明るくしてくれます。

男の子のお母さんの手紙には、男の子が小さい時になかなか話す事ができないので、とても心配したと書いてありました。

ぼくは、さくら級と一組の区別をつけない。みんなクラスの友達です。だから困っていたら、その男の子、女の子、いろいろな人を助けてあげたいです。

運動会で、花がさを楽しくおどったり、またみんなでいっしょに遠足に行って、たくさん思い出を作っていきたいです。

これからも、よろしくね！

## 【小学校3・4年生の部 佳作】

私が思ったこと

東原小学校4年 小櫃 梨衣

私は電車で出かけるとき、横はま駅で乗りかえをしたことがあります。電車が来た時に銀色のドアが開いて、その下にある注意を指すピカピカしているのがあって、また電車が来ると音楽が鳴るのを見たりしました。なんでこんなものがあるんだろうと思ったら、福祉のじゅぎょうでこの前あったのは目の不自由な人や、耳の不自由な人のためだということがわかって、体のどこか一部だけでも不自由だと大変なんだなと思いました。

なので、自分たちのできることをして、すべての人が幸せになれるようにくふうをふやしてほしいと思います。

またお年寄りの人は、ずっと立っているとつらいと思います。なので電車などでつらそうだったら、かわって楽になってくれたらいいと思います。理由は、お母さんといっしょにすわっていたら、お年寄りの人が入ってきて、そしたらお母さんが、

「すわりますか。」

と言っていたのでお年寄りの方が

「ありがとうございます。」

と言ってすわったから私もそうしたいって思ったからです。そしてお年寄りの人が少しほっとしていたから、せきをかかわるだけなら小学生の私でも、やくにたてるって思ってちょっとうれしくなったから、今度それをしてみようと思います。

## 【小学校5・6年生の部 佳作】

自然に思いやりのある事

相武台東小学校5年 三宅 湧也

ぼくは、3年生の時に左手が勝手にグーになってしまいました。

北里大学病院に、3か月の間入院する事になりすごいショックでした。

入院してから、色々な病気の人を見てきました。たとえば、体がおもうように動かない人や、立つとふらふらする人など、いっぱいいました。

いつも夜八時になると面会時間がすぎ、お母さんがいなくて悲しくなっていました。でもそんな時、ゆい一助してくれるのが、同じ年位の小学生や、中学生のお兄さん達でした。折り紙をしたり、ゲームだったり、えい画を見たり、お話して楽しい時もあり、つらい事をわすれられました。色々な人に感謝しています。

ぼくは、いつも健康が当たり前だと思っていたけれど、そうじゃない人がいっぱいいる事が分かりました。病院では、自然とおたがいを気づかう事ができました。どんな人にも思いやりを持って、行動する事が大じだと思いました。

一つ年下の友達は、足をけがして歩けないので、車いすの速さに合わせてゆっくり歩きました。

具合の悪い人が同じ部屋にいる時は、なるべく静かにしていました。

ご飯が食べられない人の前では、おいしそうに何かを食べるのではなく、こっそり食べていました。

このように、相手がどう思うのかを考えて、行動して  
ました。病院にいと、おたがいがおたがいの事を思いや  
っています。

ぼくは、自分の入院生活の中で学ぶ事ができた、相手の  
こまっている事や、気持ちによりそって行動するという事  
を、これからもしていきたいと思っています。

## 【小学校5・6年生の部 佳作】

おばあちゃん、がんばって！

ひばりが丘小学校5年 前川 成瑠

わたしのおばあちゃんは、体の左側が不自由です。なぜかというと、歩いている時に、とつ然たおれてしまい、のうの右側で「のう出血」をおこしてしまいました。それで、のう出血した右側の反対側、左側が不自由になってしまいました。

おばあちゃんは、いつも車イスかつえの生活です。なので、外に一人で出かける事もあまりありません。おばあちゃんの家遊びに行く時は、手伝ってあげます。おばあちゃんの家にはエレベーターがあるので、いっしょに乗ってあげたり、つえを使う時は手をつないであげて、少しでも安心できるようにしてあげたりしてます。車イスをおすこともあります。

でも、おばあちゃんは、体は不自由だけど心はとっても元気です。よくわたしは、おばあちゃんと電話をします。その時に聞こえるおばあちゃんの声は、いつでも元気です。

おばあちゃんは、少しでもよくなるようにいつもリハビリをがんばっています。体は不自由だけど、心は元気なおばあちゃん。少しでも良くなるように、リハビリをがんばるおばあちゃん。本当はつらいはずなのに、いつでも、いつまでも笑顔なおばあちゃん。わたしは、そんなおばあちゃんが大好きです。

わたしは、これからも体にしょう害がある人を自分からすすんで助けたり、人が安心できるようなことをしていきたいです。

また、おばあちゃんに会う時は、前よりもっと良くなっ  
ていてほしいです。

おばあちゃん、がんばって！

## 【小学校5・6年生の部 佳作】

おばあちゃんのかいごをして感じたこと

立野台小学校5年 増川 ころろ

去年、私のおばあちゃんは、転んで右のかたをこっ折してしまいました。入院して手じゅつをしました。右手は全然使えなかったので、ごはんを食べるのが大変そうでした。

私は、よく病院へお見まいに行きました。そこで私が気が付いたことは、病院にはたくさんの手すりやかいご用のベッドがあり、体の不自由な人が使いやすくなっていることです。入院中はかんごしや病院のスタッフの人に着がえの手伝いやおふろに入れてもらったり、色々なことを手伝ってもらいました。

一カ月も入院していたので、退院する時は今までと同じ元気なおばあちゃんになると思っていました。でも、一人でできないことがたくさんありました。退院してからおばあちゃんの家にはげん間、トイレ、おふろに手すりをつけたり、かいご用のベッドを入れました。そのおかげで、たくさんのかいごを一人でできるようになりました。でも、おふろに入ったり、着がえたり、まだできないことがありました。

そのために私のお母さんがおばあちゃんをおふろに入れてあげたり、私が着がえを手伝ってあげたり、かみの毛をかわかしてあげたりしました。

実さいにおばあちゃんの手伝いをしてみて感じたことは、かいごをすることの大変さです。大変さの一つは手伝うのがおずかしかったことです。着がえる時に、動かせない右手にそでを通すのが最初はおずかしかったです。でも、お



ばあちゃんもやりやすいように協力してくれたので、おたがいにうまくできるようになりました。かいごをする人も、かいごをされる人も、工夫をすることが大切だと思いました。大変さのもう一つは毎日おばあちゃんの家に行っていたので、私たち家族の生活が今までと変わったことです。おばあちゃんの家は近いけど、毎日行くということが大変でした。おばあちゃんの手伝いをして、かんごしの大切さが分かりました。

今でも、週に一回りハビリに行っています。少しずつ良くなってきたので自分でおふろに入ることができたり、着がえられるようになりました。そして、手をかたまであげられるようになりました。

私は、かたをこっ折してしまうとたくさんの方が一人でできなくなり、すごく不自由ということが分かりました。世の中には、手だけではなく体が不自由な人はたくさんいると思います。体が不自由な人のために、手すりなどのせつびをもっとたくさん作ると良いと思います。私は体が不自由な人をみかけたら助けてあげられるやさしい人になりたいです。

## 【小学校5・6年生の部 佳作】

人の良いところ

座間小学校6年 佐久間 駿汰

ぼくは、障害がある人たちのくらし方や、便利になるような道具について考えました。

はじめに障害について考えていきます。障害といっても、歩くことが不自由な人、目が不自由な人など、いろいろな障害があります。骨を折って手が不自由な人も、障害があると言えます。

ぼくのお姉ちゃんも、障害があります。お姉ちゃんは、自分の気持ちをうまく伝えることが難しい障害です。お姉ちゃんの悪いところは、いやなことを「いや」と言えないことや、何を話してよいかわからない時があることです。

そんな時に、できないことやわからないことをバカにする人は大きらいです。自分で悪いところをなおそうと努力していることも知らないで、バカにするのは許せません。だからみんなきやすく「障害者」というのは、やめてほしいです。言われた人、言われた人の家族、言った自分などのことを考えるといやな気持ちになるはずです。

障害がある人たちは、ふつうの人よりすこしできないことがあります。勉強も同じです。

しかし、できないことばかりではありません。本当に、なんこもとりえがあります。ぼくのお姉ちゃんは、マラソンがすごく得意です。一キロ二分～三分で走ることができます。こういう人たちだからこそ、得意なこともいっぱいあるのです。

こういう人たちに便利な道具はありません。しかし、そ

の人たちにあわせることが一番です。合わせすぎてもいけません。悪いことをしていたら、とめることもその人にとっては勉強になります。

これを通して伝えたいことは、人は悪いことばかりではありません。かならず良いところがあるはずです。だから、その良いところをさがすことが一番大切だと思います。そして、どんな人とも助け合うことが必要だと思います。

## 【中学校の部 佳作】

もっと理解しあいたい

栗原中学校2年 北村 真子

しあわせ、こうふく、ゆたかさ。「福祉」という言葉が持つ意味らしい。私は最近、福祉は意識されているように感じるが、実際にはどれ位、人々に幸福をもたらすことができているのかと、疑問に思うことがある。

私は昨年、学校の総合活動の一環として、福祉体験に参加した。また、私は手話コースに参加した。その体験には、講師の先生に来ていただいた。数人いたうちの一人が、難聴を抱えている方だったのを覚えている。そんな体験の中では、自分の名前を手話で表して、自己紹介をしたり、手話を使って歌を歌ったり等、印象に残る体験ができた。また、手話以外にも読唇術や筆談等の、コミュニケーションがあるということも、教えていただいた。しかし、数あるコミュニケーションのとり方の中でも、手話が一番便利で使いやすいという話があった。その反面、手話が使え人とならしか会話が出来ないという不便さがあった。この事に関しては、国や政府がいくら頑張っても意味がないと思う。なぜなら、手話は出来る人は個人で学んでいるからである。手話を使える人がもっと増えたら、福祉の状態はよくなると思う。

しかし、ここまで読んで、筆談で会話をすればいいのでは、と思う人もいるのではないか。確かに筆談では、私達からも身近で、気軽にできるコミュニケーションの方法だと思う。ここからは、私が個人的に調べて考えた話だ。もし、生まれつき、小さい時に聴力を失っていたら……、漢

字や文字を学ぶ術はないだろう。それに加え、生まれつきだったら、日本語さえも分からないのである。例えば、日本人は英語を話す時は、基本的に日本語の文を作ってから、その文を英訳する。そして、英語を原語とする母国出身の人ならば、話したいことが直接英語として頭に浮かぶだろう。手話もそれと同じだ。言葉が話せる人は、言葉から手話にして話す。しかし、直接頭に手話が浮かぶ人もいる。そんな違いが、きっとコミュニケーションの壁を築いてしまっているのだと思う。手話が出来ないのなら、ジェスチャーを使うことでも良い、とも参考にした資料に書いてあった。聴力障害者について、もっと理解を深めてほしい。

また、私は生まれつき左耳が聞こえづらい。小学校の時には、あまり気にならなかったが、中学校に入ってから、気になる事がとても多くなった。理由としては、部活が一番に考えられる。私は吹奏楽部に所属しており、音に触れる機会が多いからである。そんな左耳のことについて、二つの印象に強く残る出来事があった。一つ目は、部活で自分が出ない本番の手伝いに行った時だ。その時は、本番に出る学校のリハーサルを見学していた。指示が出るまでそこで待機ということだった。指示が私の左の方から小声で出た。しかし、私は指示の内容が全く分からず、そもそも指示が出ていたということも分からなかった。指示の内容を近くにいた友達に聞いた。指示は教えてもらえたが「聞こえなかったんだー。そっか、左耳が聞こえづらいんだもんねー。」と小馬鹿にするような口調で言われ、悲しく、悔しかった。その日から、耳のことをいうのは、必要最低限で信用できる人にしようと思った。しかし、なぜ耳が聞こえないことを言われなきゃならないのか。私だって耳が

「聞こえない」のではなく「聞こえにくい」という、目が悪い人と同じようなイメージなのに。もう一つの出来事は、席替えの時の話だ。当時の私のクラスは、右の列に女子、左の列に男子という席だった。私は女子なので右の列で、隣の人とは上手くコミュニケーションがとれない状態だった。そんな中、列の入れ替えを提案したことを賛成してくれた人達は、本当に感謝すべき人と感じている。

とても長い文章となってしまったが、私がこの作文を通して伝えたい事は、「理解を深めてほしい」ということと「自分の都合を押しつけないでほしい」ということだ。これは聴力障害者だけに限らず、視力障害者など別の障害を抱えている人と関わる時にも、考えてほしい。私は、自分の聴力にコンプレックスを感じている。社会には、そんな人が少なからず、いると思う。福祉について意味も無く語るより、理解を深め合うことが、何よりも福祉に貢献できる道だと思う。

## 【中学校の部 佳作】

障害者等用駐車スペースについて

南中学校2年 小川 芳野

多くのショッピングセンター、公共施設、飲食店などには「障害者等用駐車スペース」という優先駐車スペースが設けられています。ほとんどの人は、そこが足の不自由な人など歩行が困難な人たちが使用する場所なので空けておくことが常識だと思っています。

私の祖父は足が少し悪く自分で運転をしていますが、障害者等用駐車スペースに車を停めています。以前、私が夏休みに祖父母の家へ出掛けた時に、近所のショッピングセンターへ連れて行ってもらいました。その日は混んでいて、障害者等用駐車スペースもいっぱいになっていました。停めてある車には、車いすマークのシールが貼られていませんでした。私たちは仕方なく出入口から離れた場所に車を止め、ショッピングセンターへ向かいました。歩きにくそうにしている祖父を見ながら何故、地面に大きく車いすのマークが書いてあるのに、この場所へ停めてしまうのだろう。「近いから」「空いているから」という理由で、本当に必要な人が使えないと困るのにと考えました。

岡山で祖父が障害者等用駐車スペースに車を停める時に、白地に緑のマークのプレートを窓の近くに掛けていました。「ほっとパーキングおかやま利用証」という文字とクローバーマークや車いす、杖をついた人、妊産婦等のマークが書いてありました。私はそのプレートを今まで見たことがなかったので、今回調べてみました。

一定規模以上の施設の新設の際には、車いすで利用でき

る幅の広い障害者等用駐車スペースの設置が義務づけられています。

車いす使用者が乗降するためには、広いスペースが必要だそうです。私は今まで、何となく通常の駐車スペースよりも幅が広いとは思っていましたが、車いすの乗り降りをするためだということを認識していませんでした。車いすで乗り降りする人は、通常の幅の場所が空いていてもそこへ止められないことが多いのです。

障害者等用駐車スペースを利用可能な人についても調べてみました。ここでいう「障害のある人」とは、障害者の他にも高齢者、妊産婦、けが人等も含まれるそうです。なので、車に車いすシールを貼っていない人でも、対象者であれば利用できるということが分かりました。

ただ今回、国土交通省のホームページより資料を参照したのですが、そこにも「当該駐車スペースに障害のない人が駐車し、障害のある人の円滑な利用が阻害されている実態」ということが記載されていました。やはり、全国的にこういった事が問題になっているのだなと思いました。

障害者等用駐車スペースを使う人のために、「パーキング・パーミット」という制度があります。岡山で見たプレートは、その制度と同様でした。パーキング・パーミット制度とは、地方公共団体内共通の利用証を交付することにより駐車車両を識別し、不適正な駐車を抑止することと目的としています。交付された利用者は、利用証を見やすい場所に掲示します。

座間市役所の福祉の窓口でパーキング・パーミット制度が採用されているか尋ねたところ、未導入でした。そこで神奈川県庁に問い合わせたところ、県議会で何度か取り上



げられているが、やはり県内では未導入だということが分かりました。全国で、現在約三十の府県がこの制度を導入しているようです。制度の内容やマークなどは、地方公共団体により異なるそうです。

この制度が使われているのにばらつきがあるのはメリット・デメリットがそれぞれあるからだと思います。メリットとしては、利用対象者が分かりやすいことや利用対象者以外の人による利用がある程度減少すること、地方公共団体による公的な仕組みであることです。デメリットとしては、利用対象者が多いため広いスペースが必ず必要な車いす使用者が停めづらくなったという意見があること、利用対象者の要件を満たさない一部の高齢者等は足腰が弱いなどの事情があっても使えなくなること、公的であっても強制力はないこと、公的コストが必要なことなどが挙げられます。このため、全国统一で導入に至っていないと思われれます。

障害者等用駐車スペースは、入り口の近くにあります。それは、私たちにとってはほんの数メートル歩くだけ、という意識であっても体の不自由な人にとっては、それがとても大変なことだからです。どんなに制度を整えても、皆がそれを守らなければ意味のないものになってしまいます。世の中には、様々な境遇の人がいます。自分の事だけでなく、他の人の事も考え思いやりのある行動をとることが本当に暮らしやすい社会につながると私は思います。

## 【中学校の部 佳作】

道をひらくために

南中学校2年 常野 望愛

みなさんは視覚に障がいのある方の生活を想像したことはありますか？

私は小学校のとき、二回程視覚についての福祉体験をしました。その体験で感じたことを、いくつか紹介したいと思います。

一つ目の体験は、白杖を使って歩くという体験です。白杖というのは、視覚障がいの方が歩くときに使う白い杖のことです。私は、はじめ白杖の説明を聞いたときは「自分で歩きたい道を探りながら歩くことができるのだから簡単だな。」と思っていたのですが、実際目隠しをして白杖を使いながら歩いてみると、真っ暗でとても怖くて、歩くのがとても難しかったのです。白杖はたしかに、自分で歩きたい道を探りながら歩くことはできるけれど、一・二歩先までしか探ることはできないので、歩いていたら壁や人に当たってしまったりして、思わぬトラブルを起こしてしまうこともあるのです。実際に私が白杖体験をしたときも、何も障害物が無くて安全だと思って歩いていたら、目の前にコーンが置いてあって、ぶつかってしまい転びそうになりました。

白杖は、慣れて使いこなせるようになるまで、すごく時間がかかります。慣れるまでは、常に緊張しながら歩くので、歩くだけで疲れてしまうし、一人で杖だけを頼りに歩くのでとても怖いと、白杖を使ってみて強く思いました。

二つ目の体験は、盲導犬と一緒に歩くという体験です。

盲導犬は駅などで見かけたことがあったり、テレビでもよく紹介されていて、白杖よりは想像が付きやすいと思います。私が盲導犬の体験をしたときは、白杖の体験をした後だったので、白杖体験で味わったドキドキがまだあまり抜けていなくて、自然と歩くペースがゆっくりになってしまいました。だけど、私と一緒に歩いてくれた盲導犬は、そんな私の緊張感を感じとってくれたのか、さりげなく私の歩くペースに合わせて、ゆっくり歩いてくれたのです。そのおかげで、私は安心して、無理にペースを速めたりせず、自分のペースでゆっくり歩くことができました。

このように、盲導犬は飼い主が安心して、安全に歩くためのお手伝いをしてくれるのです。「ブリッジ」と、指示をすると、階段やエレベーターを見つけて、その前に一時停止をして階段やエレベーターの場所を教えたりしてくれます。

盲導犬の体験をした時は、「安全に歩くことができるから、白杖より盲導犬の方がいいな〜。」と、思っていたけど、家に帰ってからよく考えてみると、盲導犬を信頼して歩いている、その盲導犬と信頼し合うまでには長い時間がかかるし、盲導犬も生き物なのだから、時には体調を崩してしまうこともあると思います。そうなったら、大事な約束があったときに約束の場所へ行くことさえ出来なくなってしまう。そんなことをよく考えたら、結局は白杖も盲導犬もどちらが良いのか悪いのかなんて、特に無いのだと私は思いました。

私は、この福祉体験をしたことでたくさんのかんじ、考えました。

例えば、白杖や盲導犬を使っている人が、自分の家から

駅まで行くのにいくつもの壁があるのだらうと考えてみました。「盲導犬を連れて歩ける程の十分なスペースが全ての道にあるのだらうか。」「音の出る信号機はそんなにたくさんあるのだらうか。」「エレベーターが無くて階段しかない所で、白杖を使っている人はどれだけ苦勞するのだらうか。」家から駅までのほんの少しの距離でも、これほど多くの壁があるのに、これを社会全体で考えたら、数え切れないほどの壁があると思います。

健常者である私達は過ごしやすいと思っている社会でも、違う角度からみると、決して過ごしやすいと言える社会には、まだなっていないと私は思います。でも、そうやって同情しただけでは何も変わりません。だから私は、みんなが過ごしやすい社会を考えるだけではなく、それを行動に移せるような社会にしていくことが、この世界の大きな目標であると思います。

最初は一つの細い道たちであっても、その細い道たちが集まることで大きな道はひらけるのだと思います。だから私は、いつかは大きな道がひらくことを信じて、みんなが過ごしやすい社会をつくれるように、小さなことから行動に移せるようにしていきたいと思います。

## 【中学校の部 佳作】

福祉について

南中学校3年 小畑 郁弥

僕が中学1年生の時、福祉について身近の大人の方に聞く宿題があり、そうして聞いたものの中に印象に残った言葉があります。それは「福祉という字の福の字は幸せという意味があり、祉という字にも幸いという意味があり、福祉とは全ての人が平等に、幸せにという意味です。」この意味だったことを知らなかった僕はとても驚きました。

福祉について調べていて、分かったことがあります。福祉を英語にすると、ウェルフェアという言葉になります。この言葉は2つの単語がつながっていて、well（よく）という意味とfare（生きる）という意味があり合わさって「よりよく生きる」という意味になります。

「よりよく生きる」について思い浮かんだのは、「ユニバーサルデザイン」です。ユニバーサルデザインは障害者や老人、小さい子どもなどだれにでも便利に過ごせるような製品や設備のことです。言いかえると誰にでもよりよく過ごせるデザイン、「平等」や「幸せ」という意味もありますが、主によりよく生きるという意味が強いと思います。なぜならユニバーサルデザインの7原則というものがあって、その内容は、公平性・自由度・単純性・分かりやすさ・安全性・負担の少なさ・スペースの確保と、幸せというよりもよりよく生きるという意味に近いからです。

「幸せに」という意味には社会福祉があり、それは未成年や高齢者や障害者で生活上なんらかの支援や介助を必要とする人や経済的困窮者・ホームレスなどに対し、生活の

質を維持や向上をさせるためのサービスを提供することで、どんな人も幸せに平等になる街作りを目指す取り組みに思えます。

僕の祖父は、僕が小学1年生の頃に頭を事故で強打し、意識はあるけど、ご飯も一人で食べることもできないくらいの重傷で、とても大きな障害を持ってしまいました。僕は小学1年生の頃まで、今住んでいる神奈川から名古屋まで新幹線でいって、祖父の住むマンションへ行ってよく遊んでくれていたのは覚えています。祖父は、よく自分の力こぶを自慢していました。祭りや、もちつきにも連れていってくれました。今でも祖父の家へよく行きますが、祖父は今もまだ入院中なので、祖母は一人暮らしです。あんな元気だった祖父が、いきなり何もできない姿になってしまったことに悲しく思ったし、くやしきもありました。そして人生は何が起こるか本当に分からないなと思い、このようなことが自分や他の家族や友達にいつ起こるか分からないと少し思い知らされた感じにもなりました。

小学1・2年の頃はじっとしていて動けないとこんなに大変なんだなと思っていたけれど、今思ってみると、「自分が祖父にできることは何かな」という思いも出てきました。中学2年生の頃に祖父のお見舞いに行ったら、足におくみができていることに気づき「自分にもできることがあった」と思い足をマッサージしました。これで治るかどうかは分からないが、祖父の足をマッサージしました。この時僕は自分から困っている人に何か手伝えることを探し、支えてあげることの大切さを改めて感じました。そう考えると、電車でお年よりに席をゆずることも小さな福祉なんだなと思いました。名古屋で祖父の看病をしている祖母も、

そろそろ80歳です。なのに毎日のように病院へ行って祖父の看病をしていると思うと、何か手伝ってあげたいなと思います。そして自分ももっとガンバラなきゃなとも思います。だからこそ目の前のことももちろん、高齢化が進む今、僕らがお年よりの方達を支えていかなければならないなと思いました。

僕が思う福祉について、単に幸せに、平等によりよく生きるという意味だけでなく、自分がその立場になってどうすればうれしいかということを考え、物や街を作っていく、ということが福祉の本当の意味だと思います。

## 【標語の部 最優秀賞】

差し出した その手で広がる 笑顔の輪

東中学校 2年 澤田 芽

## 【標語の部 優秀賞】

優しさは みんなができる おくりもの

東中学校 3年 南平 夏果

思いやる 心が結ぶ 住みよい社会

座間在住 清水 隆

## 【標語の部 佳作】

たすけあい やればやるほど えがおになる

座間小学校 2年 高橋 千歩

助けあい 心をつなぐ あいことば

相武台東小学校 4年 河治 美和

大丈夫？ その一言で 救われる

座間中学校 1年 小川 桃子

さしのべる あなたのその手が 贈り物

南中学校 1年 和田 実優